

再帰形の束縛条件について

吉田光演

0. 序論

照応形の束縛に関する分析は Chomsky (1981) 等で束縛理論 (binding theory) として一応結実した。しかし、GB 理論から Chomsky (1995) を軸とする極小理論 (Minimalist Program) への発展によって、指標等の補助情報や統率概念が廃止された結果、束縛理論の位置づけ自体が不明確になっている。又、Reinhart & Reuland (1993) 等の研究は、再帰形の多様なふるまいは束縛 (同一指標と先行詞による c 統御) と統率範疇による構造的な分析では説明できないという理由から、束縛原理自体の見直しを主張している。本稿ではこれらの動向を背景にして、以下の問題を考察する。

i) 照応形と代名詞の相補分布が崩れる問題を中心に束縛原理を再検討する。Reinhart & Reuland (1993) は項構造の分析を全面に出して、束縛原理から logophoric (発話主体指向的) な再帰形を分離したが、これは正しいのか？

ii) 再帰形の形態的相違は束縛条件とどのように関連するか？例えばオランダ語には単純再帰形 “zich” と複合形態の再帰形 “zichzelf” がある。

(1) a. Max₁ haat zichzelf₁/ *zich₁. b. Max₁ schaamt zich₁/ *zichzelf₁.

Max hates SELF

Max shames SELF

“zichzelf” は他動詞に現れ、短距離束縛され、“zich” は語彙的な再帰動

詞に現れ、長距離束縛を許す。この相違はどのようにして説明されるか？
 iii) 極小理論における再帰形の移動分析 (LF 接語化) は従来の束縛理論を超えることができるか？又、それは経験的にも支持できるか？

1. GB理論における束縛原理とその問題点

標準的な束縛原理はGB理論では次のように定義されている。

(2) 束縛原理 (Chomsky (1981), Chomsky (1986)) :

- A. 照応形 (anaphor) はその統率範疇 (governing category) 内で束縛される。
- B. 代名詞類 (pronominal) はその統率範疇の中で自由 (free) である。
- C. (固有名などの) 指示表現 (R-expression) は自由である。

(2) が適用される局所的な領域である統率範疇は次のように定義される。

(3) 統率範疇 (GC) :

β が α の統率範疇であるのは、 β が、 α と α の統率子および α に接近可能な拡大主語 (accessible SUBJECT: 文とNPの主語および数・人称の一致要素 Agr (=agreement)) を含む最小の範疇である場合である。

(4) 接近可能性 :

β が α に接近可能なのは、 β が α を c 統御し、かつ β の指標を α に付与しても $*[\gamma_i \dots \delta_i \dots]$ の条件 (i-within-i condition) に違反しない時である。

Huang (1983) によれば、(3) の統率範疇で照応形には接近可能な拡大主語が必要だが、代名詞は拡大主語で十分である。これを次の文で例示する。

(5) a. *They₁ believe (that) [IP each other₁ Agr₁ are intelligent] .

b. They₁ believe [IP each other₁ to have won] .

c. *They₁ believe [IP them₁ to have won] .

d. [IP They₁ liked [NP pictures of each other₁]] .

e. *They₁ liked [NP Mary's pictures of each other₁] .

f. They₁ expected that [IP [NP pictures of each other₁] Agr₂ would be

on sale].

- g. They₁ expected that [IP [NP pictures of them₁] Agr₂ would be on sale].

(5a) で従属文の Agr は “each other” の統率子で、又拡大主語であり、従属文の IP が統率範疇となる。“each other” はこの中で束縛されず、原理 A に違反する。他方、例外的格付与構文 (ECM) の (5b) では “each other” の統率子は格を与える主節の動詞 “believe” であり、主節が統率範疇となり、主語 “they” が “each other” を束縛する。(5c) では (5b) と同じ統率範疇内で代名詞が束縛されるので B に違反する。(5d) , (5e) では “each other” の統率子は “pictures” だが、(5d) では NP 内に主語がないので、統率範疇は主語を含む主文まで広がる。(5e) では主語 “Mary” を含む NP が統率範疇となるが、“each other” は NP 内で束縛されず、A に違反する。この限りで束縛原理は照応形と代名詞の相補分布と、束縛の局所領域の拡大の可能性を適切に説明する。

ところが、(5f, g) では照応形も代名詞も同じ環境 (主語の内部) に現れ、どちらも適格文なので相補分布が崩れる。原理 A, B を満たすには、(5f) の照応形の統率範疇は主文 IP, (5g) の代名詞の統率範疇は埋め込み文の IP と考えねばならない。この相違を説明する道具が接近可能な主語である。(5f), (5g) で照応形と代名詞の統率子は “pictures” だが、その投射の NP 内には主語がないので、NP を含む埋め込み文の IP が統率範疇の候補となる。(5g) では代名詞 “them” の主語は埋め込み文の Agr であり、統率範疇である従属節内で “them” が自由なので、B を満たす。しかし、(5f) の従属節の Agr は照応形の接近可能な主語ではない。Agr の指標と埋め込み文の主語の指標は一致関係により同一になり、先行詞 Agr と同じ指標が “each other” にも付与され、“i-within-i” 条件に抵触するからである。故に (5f) では、埋め込み文は (3) の条件を満たさず、統率範疇は更に主文へと拡大する。

- (5f) They₁ expected that [IP [NP₂ pictures of each other_{1(*2)}] Agr₂

would]

しかし、照応形には接近可能な拡大主語が適用され、代名詞では単なる拡大主語で十分というのは不自然で、記述の域を出ない。i-within-i 条件が指標付与の一般的条件なら、(5g) でも [NP₁ pictures of them₁] という構造になり、i-within-i のフィルターで除外されるはずである。Chomsky (1986) はこの問題を解決するために、接近可能な拡大主語の概念を取り除いた完全機能複合体 (CFC: complete functional complex) という概念を提案した。

(6) α の統率範疇は、 α とその統率子を含む完全な文法関係 (主語・目的語) を含み、そこで束縛理論を満たしうる最小の領域である。

(5g) では埋め込み IP は代名詞の束縛原理 B を満たす最小の CFC だが、(5f) ではこの IP は照応形の束縛条件を満たさないで、上位に拡大する。この分析は、照応形が先行詞に束縛されるものであるのに対し、代名詞ではそもそも主語は別指示であり、束縛が必須ではないという両者の本質的相違を統率範疇に組み込む意味で正しい方向だと思われる。しかし、(5a) の照応形の CFC はなぜ主文にまで拡がらないのかという疑問は残る。

2. Reuland & Reinhart (1995) の項構造による束縛条件の分析

Reuland & Reinhart (1993, 1995) (以下 R&R と略す) は (2) の束縛原理に対する対案として、述部の項構造から再帰性を分析することを主張する。R&R は統語的述語と再帰性を次のように定義する (cf. R & R (1993))。

(7) a. The *syntactic predicate* formed of (a head) P is P, all its syntactic arguments and an external argument of P (subject). The *syntactic arguments* of P are the projections assigned θ -role or Case by P.

b. A predicate is *reflexive* iff two of its arguments are coindexed.

c. A predicate (formed of P) is *reflexive-marked* iff either P is

lexically reflexive or one of P's arguments is a SELF-anaphor.

(7c) の “lexically reflexive” は (1a) の “schaamt” のような語彙的・内在的再帰動詞を意味し, “SELF-anaphor” は “zichzelf”, “himself” 等の複合形を指す (R&R は “zich” のような単純形の再帰形を “SE (=simple expression)” と呼ぶ)。R&R は (7) の概念を用いて束縛条件を次のように定式化している。

(8) A. A reflexive-marked predicate is reflexive.

B. A reflexive predicate is reflexive-marked.

R&Rによれば, (5f) の “each other” は統語的述語の構成要素にはならない。

(9) (=5f) They₁ expected that [[NP pictures of each other₁] would be on sale].

“each other” を補部とする主要部 “pictures” は (7a) の述語 P に対応するが, 主語 (=外在項) がないので統語的述語ではない。故にこの照応形は (7b) を満たさないので (8) の束縛原理の対象にならず, 先行詞=束縛子を必要としない logophoric な照応形として解釈される。NP でも, 主語・目的語が項として全て現れる場合には再帰的にマークされた述語になる。

(10) */? [Your₁ picture of myself₂] would be nice on that wall.

(10) では主語 “your” の存在により, picture の項は再帰的でなければならないが, 同一指標が付与されないので非文になる。R&R の分析の長所は, 再帰的關係が成立しない場合には束縛原理が適用されず, logophoric な再帰形の分布を適切に予測しうる点にある。

(11) a. The pictures of himself₁ [that John₁ saw in the post office] was ugly.

b. There were five tourist₁ in the room apart from myself₂.

c. * Five tourist₁ talked to myself₂ in the room.

(11a) は, 先行詞 “John” は再帰形を束縛しないので, 標準的な束縛原

理では説明できない。R&Rによれば“picture”は主語をもたないので、統語的述語を形成しない。故に束縛原理を免れた logophoric anaphor として解釈される。(11b)でも再帰形を含む付加詞は統語的述語の項ではないので、原理Aは発動せず、logophoric な用法になる。他方 (11c) では再帰形と主語は述語“talk”の項であり、再帰的な述語を要求するが、同一指標が付与されないので非文になる。つまり照応形は2つのタイプに区分されねばならない。

(12) a. 照応的(束縛条件に従う) b. 発話主体指向的(束縛条件と無縁)
R&Rの分析に従い、束縛原理の対象になるのは再帰形を項としてもつ述語が主語をもつ場合だけだと考える。ただしR&Rの束縛原理の定義には c 統御も束縛概念もないので、次のような非文は原理Aでは排除できない。

(13) *Himself₁ likes John₁.

“himself”と“John”も述語“like”の項であり、同一指示関係にあるので、(13)は(8a)を満たす。しかし“himself”は先行詞にc統御されない主語位置にあるので非文である。¹従って、構造的な束縛概念を維持しつつ、R&Rの知見を取り入れて、次のように束縛原理Aを修正しよう。

(14) 束縛原理A：照応形 α は完全機能複合体 (CFC) の主要部と L-relate (語彙的に関連) する時、 α はその CFC 内で束縛されなければならない。

(14)によって照応形はその完全機能複合体が存在する場合は束縛されなければならない。例(5f)では“each other”とL-relateする主要部は“pictures”だが、その投射内に主語は存在しないので、CFCそのものが定義されない。故に、(14)は発動しない(logophoricな表現として解釈可能になる)。

3. 再帰形の形態的特性、Burzio (1994) の分析

R&Rの提案のもう一つの柱は、再帰形の形態的区別である。彼らによれば、単純形 SE と複合形 SELF の機能は次の点で区別される。

(15)	SELF	SE	Pronoun
Reflexivizing function	+	-	-
R (referential independence)	-	-	+

再帰化機能をもつのは複合形だけで、単純形にはこの機能がない。他方、代名詞は指示的に独立している（ ϕ 素性が指定）が、指示的独立性がない点では単純形も複合形も同じである。同一述語の中で2つの項が同一指標をもつ場合は、再帰的マーキング（再帰化）が確立されねばならない。

(16) a. *Max₁ criticized him₁/Max₁ b. Max₁ criticized himself₁.

(16a) では代名詞や固有名は述語を再帰的にマークできないので、(8b) により B に違反する。(16b) では SELF 形が述語を再帰的にマークするので、A を満たす。オランダ語のように SE と SELF 形が区別される場合、通常他動詞を再帰的にマークするためには再帰化機能をもつ複合形が現れねばならない (=17a)。ところが、語彙的に既に再帰的にマークされた内在的再帰動詞では、再帰化機能をもたない SE 形で十分である (=17b)。

(17) a) Max₁ haat zichzelf₁/zich₁. b) Max₁ schaamt zich₁/hem₁.

(17b) で代名詞 “hem” (= “him”) が許されないのは条件 A でも B でもない（述語 “schaamt” が再帰的にマークしているので、A は満たされる）。R&R によれば、(17b) で代名詞が現れると、次の連鎖条件に違反することになる。

(18) Generalized Chain definition: C = ($\alpha_1, \dots, \alpha_n$) is a chain iff C is the maximal sequence such that i) there is an index i such that for all $j, 1 \leq j \leq n$, α_j carries that index, and ii) for all $j, 1 \leq j \leq n$, α_j governs α_{j+1} .

(19) Condition on A-chains: A maximal A-chain ($\alpha_1, \dots, \alpha_n$) contains exactly one link - α_1 - which is +R (fully specified for Φ -features). Case is among the Φ -features ([Persons], [Gender], [Number] and [Case]).

R&R は、束縛関係でも先行詞とそれに依存する要素間に (18) の一般化

連鎖が成り立つと仮定する。“zich”は指示性が弱い(数, 性, 格の ϕ 素性が未指定) - R要素なので, + Rの主語と共に適格なA連鎖(Max₁, zich₁)を作る。代名詞は格も ϕ 素性も指定された+ R表現なので, 連鎖(Max₁, hem₁)は2つの+ R表現を含み, (19)のA連鎖条件に違反する。SE形のないフリジア語では固有の再帰文脈でSELF形(“himsels”)ではなく, 代名詞が現れる。

(20) Willem₁ skammet him₁/ *himsels₁. (= “Willem is ashamed”)

これは原理Bに一見違反するが, R&Rによればフリジア語の代名詞“him”は格が未指定の-R表現であり, (19)のA連鎖条件に従う。

しかし, このR&Rの代名詞分析には問題がある。例えばドイツ語のSE再帰形“sich”には与格と対格が付与できるが, 属格はないので, 属格を付与する若干の動詞の再帰文脈では属格代名詞のみが現れる。

(21) Er₁ gedenkt seiner₁/ *sich₁. (= He rememberd himself)

3人称男性属格の代名詞“seiner”(= “his”)は主語と同一指示解釈も可能である。(21)で主語を先行詞とする“seiner”は ϕ 素性も格も指定された+ R要素であり, A連鎖条件に違反するが(2つの+ R連鎖), (21)は文法的である。

又, 英語と違い, ドイツ語では1・2人称の再帰形は存在せず, 1・2人称の再帰文脈では代名詞“mich (= me)”, “dich (= you)”が用いられる。

(22) Ich wasche mich/ *sich. (= “I wash me (myself)”)

(22)の“mich”が代名詞と同音異義語の再帰代名詞だと考えれば, Bの違反にはならない。しかし, 再帰形“sich”は通時的には3人称に固有のもので, 1・2人称の ϕ 素性と相容れないので, (22)で照応関係を作り出す最後の手段として代名詞“mich”が使用されると考えた方が自然である。これとの関連でBurzio(1994)は, 代名詞は独立した原理Bに支配されるのではなく, 照応形が現れない文脈に生じる“elsewhere case”として認可されると主張する。つまり代名詞の分布を制約する条件は次のように一般化できる。

(23) 代名詞は照応形が現れることができないような環境に生じる。²

(23) はフリジア語やドイツ語の代名詞分布を正しく予測すると思われる。

R&Rの分析の第2の問題は、単純再帰形(SE)には再帰化の機能がな
いという主張である。SEの ϕ 素性が未指定で、先行詞からその指定を受
け取るのならば、統語的にはやはり再帰形といわねばならない。Burzio
(1994)はこれに関連して次のような「弱い照応形の原理」を提案している。

(24) Weak Anaphora Principle (WAP) (Burzio (1994)) :

Inherent coreference (semantics) \longleftrightarrow Weak anaphora (morpho-
logy)

(24)によれば、動詞の意味等により内在的に同一指示が含まれる場合
には形態的に弱い照応形が現れる。最も弱い照応形は音形のないゼロ形態
であり、clitic < weak anaphor (SE形) < strong anaphor (複合形)の
順に形態特性が強くなる。(17)のようにゲルマン諸語の内在的再帰動詞
には弱い再帰形が現れることは(24)の一般化から導かれる。R&Rの分
類ではSE形と代名詞は再帰化機能をもたないが、Burzioによれば
SELF形もSE形も再帰形であり、その違いは形態的強さに基づく。
Burzio (1994)は更に、弱い再帰形と強い再帰形の間には次のような対
比が見られると主張する。

(25) 単一形の再帰形： subject/object oriented long distance anaphor

複合再帰形： subject oriented local anaphor

(24)は記述的には正しいが、あまりにもグローバルな原則である。そこ
で、以下の章でこの再帰形の形態的相違を統語論レベルで分析していく。

4. LFでの接語化のアプローチ

極小理論では、X $\bar{0}$ 理論の破棄と共に同一指示解釈のための指標も廃
止した結果、束縛原理Aは次のように定義される(Chomsky(1995:211)):

(26) A. If α is an anaphor, interpret it as coreferential with a
c-commanding phrase in D. (D: the relevant local domain)

Chomsky (1995) は Lebeaux (1983) の分析等に依拠して、照応形は LF で X^0 の接語化として Agr に移動すると仮定する (Chomsky 1995: 208)。

(27) LF movement approach to anaphora: the anaphor or part of it raises by an operation similar to cliticization - call it cliticization LF.

(27) により次の文の照応形の相違が説明される (Chomsky 1995:205)。

(28) a. John_i wondered [which picture of *himself*_{ij}] [Bill_j saw t]

b. John_i wondered [who_j [t_j saw [which picture of *himself*_j]

(28a) では “himself” の先行詞として “John” と “Bill” の 2 つの解釈が可能だが、(28b) では “himself” の先行詞は埋め込み節の主語 “who” だけで、主文の主語 “John” との同一指示解釈は不可能である。これを説明する手段として LF での再構成があるが、顕在的に移動した要素を繰り下げるのは好ましくない。これを回避するために、移動はコピーを残し、移動した WH 句の中のアペレータの部分 LF で CP 指定部に残り、アペレータ以外の部分が痕跡の位置で変項として写像されると仮定する。一つの解釈は DP 全体が変項として解釈されるケースである (Chomsky 1995: 206)。

(29 = (28a)) : John_i wondered [wh which picture of *himself*]_i [Bill_j saw [wh which picture of *himself*]_j] (LF-copy)

(30) John_i wondered [[which picture of *himself*]_i [wh t]] [Bill_j saw [[which picture of *himself*]_j [wh t]]] (LF mapping 1)

この構造で再帰形が接語として主文の AGR に付加されると、一致関係により “himself” の先行詞は “John” として解釈される。

(31) John_i self-wondered [which picture of t_{self}]_i [Bill_i saw [wh t]]

↑ _____ | (self, t_{self}) の連鎖

もう一つは WH 句の限定部分 D だけがアペレータとして LF で写像される場合であり、この時は痕跡位置には “picture of himself” が残り、(31) と同様に、LF 接語化によって “self” が AGR に付加されるが、最も近い

AGR は埋め込み節の AGR である。それ故に、“Bill” を先行詞とする解釈が生じる。

(32) John_i wondered [[which]_j [wh t picture of *himself*]] [Bill_j saw
[[which]_j [wh t picture of *himself*]]] (LF mapping 2)

(33) John_i wondered [which_j][Bill_i self-saw [TR t_j picture of t_{self}]]

一方 (28b) では“himself”を含む WH 句は顕在的には移動していない。LF で移動するのは WH 素性だけだから (LF-absorption), “himself” は CP 指定部には移動しない。故に“himself”は従属節の AGR に付加される。

(34 = (28b)) John_i wondered [[who_j [wh t]]] [t_j saw [which picture of
himself]_j]

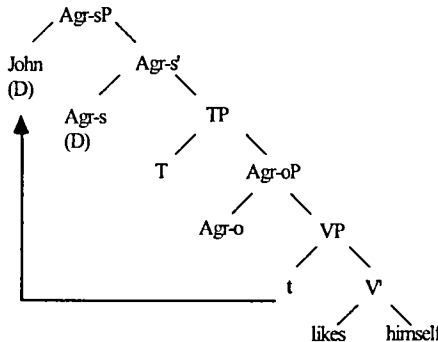
(35) John_i wondered [[which who_j[wh t]]][t_j self-saw [t picture of t_{self}]]

この再帰形の移動分析は接語の再帰形にも適用可能である。英語の再帰形は XP 範疇であり、X⁰ 移動は目に見えない LF で生じる。例えばイタリア語の再帰形は接語 (X⁰ 範疇) であり、形態的特性 (強い形式素性) のために X⁰ の照合領域 (V か AGR) に顕在的に (表層で) 移動する。

(36) Gianni_i [Agr si_i è] inginocchiato t_i. (= Gianni self knelt)

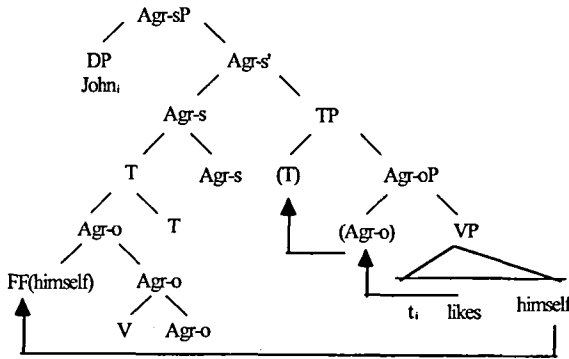
両者の相違は経済性の原理 (顕在部門での移動か LF 移動か) に還元できる。Chomsky (1995:211) は LF 接語化によって照応形の束縛条件が移動の局所性から説明できることを示唆している。この方向に沿って、例えば、文“John likes himself”は顕在部門で次のように派生されると仮定する。

(37a)



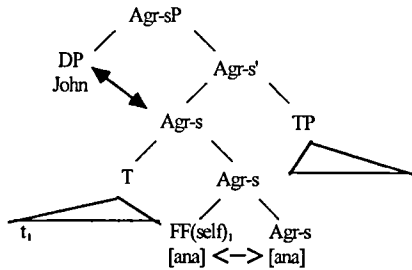
主語の DP は主語の一致要素 Agr-s の強い D 素性を照合するために、Agr-s 指定部に移動する。英語の Agr-o (目的語の一致要素) は弱いので、“himself” は LF で移動する。LF での移動 (Attract) は句全体の移動ではなく、 X^0 の形式素性 FF の機能範疇への付加である。LF で再帰形の FF (himself) (D の範疇素性と目的格・ ϕ 素性) は、V が付加された V-Agr-o の複合体に付加され、これらの素性が主要部—主要部関係の下で照合される。この Agr-o は更に時制 T に繰り上がり、最終的に Agr-s に付加される (Agr-s が T 素性を照合)。

(37b)



“himself” の ϕ 素性 (性・数) は通常目的語と同様に Agr-o 位置で照合されるが、その指示的な値は未定であり、別の先行詞の ϕ 素性を受け取って始めて指示的な値が決まる。この理由により、FF (himself) は Agr-o 位置から更に最も近い Agr-s に付加される。この移動を駆動するものが [ana] (照応) 素性であり、Agr は辞書から Numeration に入る過程で随意的に [ana] 素性をとることができるとする。すると次の構造が得られる。

(37c)



この構造で FF (himself) の [ana] 素性は Agr-s と主要部—主要部関係で照合され、Agr-s から完全な ϕ 素性を受け取り、主語 “John” との同一指示が成立する³。

次のように目的語との照応関係が成り立つ場合も全く同様に扱える。

(38) John asked them₁ about themselves₁.

argument として機能する前置詞句内の再帰形も LF 移動に従うと仮定する。LF で “them” の形式素性は Agr-o に付加され、この Agr-o の複合体に照応形の素性 FF (themselves) が付加され、照応関係 [ana] が照合される。

(38') ...[Agr-oP [Agr-o FF(themselves)_i [Agr-o FF(them) V-Agr-o]] VP..[_{PP} t_i]
| _____ | [ana]

[_{DP} Mary's picture of herself] のような名詞句内での束縛も考慮に入れると、照応形の LF での移動は次のように一般化できるであろう。

(39) LF での照応形の素性移動の標的は D, Agr (Agr-o/Agr-s) である。

このように照応形の束縛を LF 移動 (機能範疇 Agr, D との照合) とし分析すれば、その束縛条件は移動の制約に還元できる。長距離移動が可能な照応形 (例えば日本語の「自分」) を度外視すれば、照応形は最も近い Agr-s の領域から外に移動することはできない。

(5a) *They₁ Agr believe (that) [Agr-sP each other₁ Agr₁ are intelligent].

(5a) で “each other” は顕在的に Agr-s 指定部に移動し、格と ϕ 素性の照合を受ける。この後に残るのは “each other” の [ana] 素性だけだが、時制文 (+ T) の Agr-sP からこの [ana] 素性だけを繰り上げることは

できない。

(5a) Agr-s ... Agr-o ... (that) [Agr-sP each other [Agr-s' Agr-s TP]]

| _____ ** _____ | [ana]

又は + T の Agr-sP は内部にある [ana] 素性を強制的に照合し, “each other” の [ana] 素性が削除 (delete) されるのかもしれない (この場合, LF インターフェースで “each other” は解釈不能になる)。

それに対し ECM 構文 (5b) では照応形は対格の照合のために主節の Agr-o に既に繰り上がっているため, [ana] 素性は主文の Agr-s に付加できる。

(40) (=5b) [Agr-sP They₁ Agr-s believe [Agr-o each other_{1..} [Agr-s to have won]]]

| _____ | [ana]

5. ドイツ語の再帰形 “sich” の顕在的移動

この章ではドイツ語の XP の再帰形が顕在部門で Agr-o 指定部に移動する事実を観察し, 再帰形の (LF) 移動分析が正しいことを示す。

ドイツ語の “sich” (= self) は接語ではなく, DP 範疇であるが, 表層レベルで基底の項の位置から義務的に移動するケースがある。

(41) weil [AgrP Hans₁ [vp t-sub normalerweise nicht sich₁ bewundert] hat]

because Hans usually not self admired has

(42) a. weil [AgrP Hans₁ sich₁ [vp t-sub normalerweise nicht t₁ geschämt] hat]

because Hans self usually not shamed has

b. weil [AgrP sich₁ Hans₁ [vp t-sub normalerweise nicht t₁ geschämt] hat]

c. *weil Hans₁ normalerweise nicht sich₁ geschämt hat

“bewundern” のような他動詞では “sich” は SOV 語順で動詞の前 (θ 位置) に留まれる (=41)。しかし, “schämen” のような内在的再帰動詞では “sich” は主語の後 (=42a) か, C の後 (=42b) に移動する。“sich” が接語ではないことは, (42a) のように主語 DP に続く位置から分かる。

“sich” の移動は従来は随意的な scrambling として分析されたが

(Stechow & Sternefeld 1988) , “sich” の移動は義務的なので, \bar{A} -移動ではなく A 移動である。内在的再帰文脈の “sich” は顕在的に照合領域の AGR-o の指定部に移動しなければ解釈不可能な要素が残り, 派生が破綻すると仮定する。故に目的語移動 (object shift) が必然化する。Agr-o 指定部で “sich” の対格と ϕ 素性 (3 人称) が照合された後に, “sich” は更に LF で繰り上がり Agr-s に付加される。

(42a) [AGR-sP Hans₁ [_T[AGR-oP sich₁ [_{vp} ..t₁ geschämt] [AGR-s FF(sich)hat]]]
| _____ | [ana]

Agr-s への LF 移動によって, [ana] 素性が照合され, Agr-s の ϕ 素性が “sich” に指定され, 主語 “Hans” と同一指示関係が成り立つ。つまり (42a) の再帰動詞構文の特徴は, LF での X⁰ 移動の一つのステップ (Agr-o を標的にした移動) が顕在部門での XP 移動として義務的になるということである。又, (42b) では “sich” は先行詞 “Hans” に c 統御されていないので, 従来の束縛原理では説明できない。LF 移動分析では主語位置に虚辞 pro が存在すると仮定した場合, “Hans”, “sich” の [ana] 素性は Agr-s 内で適切に照合される。

(42b) ... [AgrP pro sich Hans [_{vp}... geschämt] [Agr-s FF(sich)FF(Hans)hat]]] ⁴

6. 単一再帰形と複合再帰形の相違

ドイツ語の再帰形には単一形の “sich” の他に, 複合形 “sich selbst” があるが, “sich selbst” は内在的再帰動詞とは共起しえない。

(43)a. *weil Hans₁ (sich selbst₁) normalerweise nicht (sich selbst₁)
schämt

b. weil Hans₁ normalerweise sich selbst₁ nicht bewundert

内在的再帰文脈の (43a) では “sich selbst” は基底位置でも AGR-o 指定部でも非文である。他方, 他動詞文脈の (43b) では “sich selbst” は共起しうる。この対比は (24) の WAP と対応しているが, 統語的な理由は何であろうか?

又, “sich” は長距離束縛を許すが, “sich selbst” は短距離束縛だけが可能である。

(44) a. Die Studenten₁ hörten [die Lehrer₂ über sich_{1/2} sprechen].

(the students heard the teachers (ACC) about self talk)

b. Die Studenten₁ hörten [die Lehrer₂ über sich selbst₁ sprechen].

(44) は Acl (対格付き不定詞) 構文と呼ばれるもので, (44a) のように不定詞節中の “sich” は不定詞節の対格主語と主文の主語を先行詞としてとることができる。“sich selbst” の場合はより近い不定詞節の主語だけが先行詞として解釈可能であり, 主文の主語は先行詞にはなれない (=44b)。

“sich” と “sich selbst” の対比を説明するために, 再帰形の形態特性を区別する。内在的再帰動詞と共起する “sich” の範疇素性は D で, 照応素性 [ana] と 3 人称 [3p] の ϕ 素性をもち, 随意的素性として与格・対格の格素性をもつ (=42a)。通常他動詞と共に現れる “sich” は (45b) のように D の補部に人称はあるが意味素性のない NP をもつ。“selbst” (=self) も [ana] 素性をもち, 範疇素性は N で, ϕ 素性は空であり, “sich selbst” の場合は (45c) の構造をなすと仮定する。

(45) a) D (DP)	b) D (DP)	c) D (DP)
	/ \	/ \
sich	sich NP	sich NP
+ 3p, [ana]	+ 3p, [ana] [0] + 3p	+ 3p, [ana] selbst[ana]

DP は外側か内部での (D の N 素性の) 照合を必要とする。即ち N 素性が D を標的にし, D に付加する。(45a) の “sich” は基底位置では N 素性を受け取ることができず, 解釈不可能な D が残る。故に “sich” は (42a, b) のように Agr-o 指定部に移動して, Agr-o によって D 範疇と ϕ 素性の照合を受ける。

(46) [AGR-S Subject [AGR-O [DP sich₁] [vp...t₁...]]

| _____ | (顕在的移動)

内在的再帰動詞が再帰形 “sich” 以外の目的語をとれないのは、この動詞が VP 内に具体的な意味素性をもつ NP をもつことができないからである。

(47) *Hans schämt[DP seinen[NP Vater]] (= Hans is ashamed of his father)

通常他動詞では、“sich” は (45b) の構造をもち、意味的に空の NP が D の “sich” に付加され、表層で VP 内に留まってかわまない ((41) の場合)。

(48) [AGR-s Subject [AGR-o]nicht [VP [DP sich [NP]] AGR]

LF | _____ | | _____ | | _____ | (N → D)

“sich selbst” の場合、N の “selbst” が D の “sich” に付加され、DP 内の照合関係を満たすが、“selbst” の指示値は未定である。N 範疇の “selbst” の [ana] 素性は削除 (delete) されるが、消去 (erase) されず、LF affix として最も近い先行詞 DP 内の D に付加される。(43a) の内在的再帰動詞の文脈で “selbst” が現れると、基底の θ 位置に純粋な D の痕跡以外のも ([NP selbst] 又はその素性) が残り、派生は収斂するが、LF で逸脱したものと判断される。

(43a) *weil Hans₁nicht [VP [DP sich[NP selbst₁] (+ N[ana])]schämt]

(44) の長距離 vs. 短距離束縛の対比はどうか? (44a) で先行詞の候補となる不定詞節の主語 “Lehrer” は VP 内主語位置から不定詞の Agr-s を経て、主文の Agr-o 指定部に移動し、主節の知覚動詞によって対格を付与される。

(44a) ...hörten[_{Agr-oP} die Lehrer_i [_{Agr-sP} t_i [VP t[PP über sich]sprechen(-T)]]]

“die Lehrer” は既に主文の Agr-o に移動しているので、LF で “sich” の [ana] 素性は不定詞節の Agr-s を経由して、主文の Agr 領域に移動しなければならない。ここで不定詞節の Agr-s から見れば、(37b) で見たように、主文の Agr-s も Agr-o も等距離にあるので、“sich” の素性は主文の Agr-o を標的にしてもよいし、あるいは主文の Agr-s まで繰り上がり、長距離束縛されてもよい。

(44a') Die Studenten Agr-s hörten[die Lehrer Agr-o[Agr-s[über sich sprechen]]

[ana] | _____ | | _____ |

“sich selbst”の場合はLFでFF (selbst)も繰り上げねばならず、移動の出発点はPPである。(44b)でFF (sich)が主文のAgr-oに付加された時点で、FF (sich)がAgr-oから[ana]素性の照合を受け、Agr-o指定部のDP主要部がFF (selbst)の付加の一番近い標的になる。照応形と主文の主語の間にあるDPがいわば相対化最小性の障壁になり長距離移動を阻む。即ち“selbst”のLF移動はX⁰移動だが、実質的には局所的照応形として最も近いDPを標的にする。

(44b') Subj hörten[Agr-oP[DP die Lehrer [ana]-selbst][Agr-sP t über sich selbst..]]

| _____ " " | | _____ | | _____ |

要するに、“sich”の移動はAgr-o → Agr-sへの画一的な移動であり、長距離移動が可能だが、“sich selbst”の移動はAgr-o/Agr-s + D⁰への移動であり、そこから上位のAgrへの移動は画一的ではない。DP主要部への付加の仮定により、LF移動分析でも複合再帰形をX⁰の単純形から区別して、XPと同等に扱うことができる。ここから短距離移動という特性も引き出される。

7. まとめにかえて

英語には単純再帰形は存在せず、単純形 vs. 複合形の対比がないので、6章の分析が適用できるかどうかははっきりしない。しかし、“himself”等の複合形の短距離束縛・目的語指向という性質を考えると、LFでの再帰形のX⁰移動(Agr, Dへの付加) + Dへの“self”の付加という分析が適用できるかもしれない。本稿の再帰形のLF移動分析の方向が正しければ、この分析は日本語の再帰形にも応用できるだろう。

(49) a. 太郎₁は[次郎₂が自分_{1/2}を責めている]と思っている

b. 太郎₁は[次郎₂が自分自身_{2/*1}を責めている]と思っている

「自分」はLFでAgrにX⁰移動し(長距離移動)、「自身」はより近い領

域にあるDに付加するとすれば、(49)の対比も説明できるだろう。

注

- 1 この文は確かに束縛原理Cによって除外されるが、R&RはCを再帰形の束縛に関わるモジュールとは異なる理論に含まれると考えている。
- 2 例えば、次の文の対比を参照されたい。
 - i) Everyone₁ thinks that [he₁ will win] .
 - ii) 誰も₁が [*彼₁が/自分₁が勝つ] と思っている。
 英語では代名詞が統率範疇の外から数量詞に束縛される i) は文法的だが、日本語では「彼」が数量詞に束縛される解釈は困難で、むしろ「自分」が現れる。英語の“himself”は短距離束縛しか許さず、「自分」は長距離束縛を許す。しかし、再帰形が許される時には代名詞は現れず、逆に再帰形が不可能なら代名詞が現れる点では同じであり、(24)が成立する。
- 3 Chomsky (1995:349-377) ではAGR自体の廃止を提案しているが、照合関係がTの指定部で行われたとしても、ここでの分析には影響しない。
- 4 この構造では“sich”が先行詞“Hans”をc統御するので、束縛原理Cに一見違反する。従って、“sich”はscramblingで \bar{A} 位置に移動すると分析する見方もある(酒井弘氏の指摘, p.c.)。しかし、scrambling分析では(42a, b)の内、scramblingが適用された(42b)の方が無標の語順であることが説明しがたい。紙幅の都合上、この問題の解決は今後の研究に委ねたい。

参 考 文 献

- Burzio, L. (1994): Weak Anaphora. In Cinque, G. et. al.(eds): *Paths Towards Universal Grammar*. Washington, D.C.: Georgetown University Press. 59-84.
- Choi, Y. (1994): A Minimalist Approach to LF-Reflexive Movement. Park, S. et. al. (eds.) *Minimalist Approaches to Syntax and Morphology*. Seoul: Hankuk.
- Chomsky, N. (1981): *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.
- Chomsky, N. (1986): *Knowledge of Language*. Prager: New York.
- Chomsky, N. (1994): *Minimalist Program*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Grewendorf, G. (1984): Reflexivierung im Deutschen. *Deutsche Sprache* 1. 14-30.
- Huang, J. (1983): A note on binding theory. *Linguistic Inquiry* 14, 554-561.
- Lebeaux, D. (1983): A distributional difference between reciprocals and reflexives. *Linguistic Inquiry* 14, 723-730.

中村 捷 (1996) 『束縛関係』 ひつじ書房

三原健一 (1994) 『日本語の統語構造』 松柏社

E. Reuland & T. Reinhart (1993): Reflexivity. *Linguistic Inquiry* 24, 657-720.

E. Reuland & T. Reinhart (1995): Pronouns, Anaphors and Case. In Hubert Haider et al. *Studies in comparative Germanic syntax*. Dordrecht: Kluwer.

Stechow, A. & Sternefeld, W. (1988): *Bausteine syntaktischen Wissens*. Opladen: Westdeutscher Verlag.

Bindungsbedingungen von Reflexivpronomina

Mitsunobu YOSHIDA

In diesem Aufsatz sollen im Rahmen der Minimalist-Theorie von Chomsky Bindungsbedingungen von verschiedenen Reflexivpronomina untersucht werden.

1) Wie Reinhart & Reuland (1993) behaupten, ist die "logophorische" Verwendung eines nicht vom Subjekt gebundenen Reflexivs aus bindungstheoretischen Gegenständen auszuschließen.

2) Das Bindungsprinzip B ("Pronomen sei nicht in seiner regierenden Kategorie gebunden") soll aufgegeben werden. Ein Pronomen tritt gerade in solchen Kontexten als letztes Mittel auf, wo kein Reflexiv zur Verfügung steht, z.B.: "Er gedenkt *seiner*" oder "Ich wasche *mich*" etc.

3) Koreferenz von Antezedens und Reflexiv läßt sich durch die von Chomsky (1995) vorgeschlagene LF-Klitisierung erklären. Bei romanischen Sprachen wird das klitische Pronomen auf der overten Syntax ans finite Verb adjungiert (=X⁰-Bewegung). Bei Deutsch oder Englisch findet diese X⁰-Bewegung erst auf LF (Logische Form) statt. Die obligatorische Bewegung von "sich" im Satz (i) kann man aber als XP-Bewegung nach Agr-oP (Objektkongruenz) betrachten:

(i) weil [AGR-_{SP} Hans [AGR-_{OP} sich₁ [VP normalerweise nicht t₁ geschämt] hat]

4) Der Kontrast zwischen "sich" und "sich selbst" läßt sich erklären, wenn man annimmt, daß "selbst" auf LF an einen am nächsten stehenden D (=Determinator)-Kopf adjungiert wird und somit eine lange Bewegung blockiert wird:

(ii) Die Studenten₁ hörten [die Lehrer₂ über {sich_{1/2}, sich selbst_{2/1}} sprechen].

↑ _____ |